孤独の原因，感情反応，および対処行動に関する研究(Ⅱ)†

広　沢　俊　宗

Zilboorg (1938) が，孤独に関する最初の心理学的分析を行って以来，今日に至るまで，孤独に関する心理学的研究の歴史は，大きく3つの時代に区分される。

1960年までは，主に精神分析学，および臨床心理学の立場から研究されていた (Sullivan, 1953 ; Fromm-Reichmann, 1959)。これらの研究は，実際の臨床場面における患者を観察することによって論じられていたため，研究者の主観や経験によるところが多く，実証性に欠けていたように思われる。しかしながら，Sullivan (1953) や Fromm-Reichman (1959) の精神力動的モデルが，今日の研究者の基礎になっていることは明らかである。また，孤独を，主観的状態としての孤独 (loneliness) と客観的状態としての孤独 (solitude) に区別したのもこの時期である (Von Witzleben, 1958)。

1960年代も，やはり，臨床場面での患者の観察をもとにした研究が主流であったが，調査などによる実証的研究も徐々に行われるようになってきた (Lopata, 1969 ; Lowenthal, 1964 ; Tunstall, 1967)。また，Moustakas (1961) が，実存主義的立場から研究を始めたのもこの時期である。このように，1960年代にはさまざまなアプローチが混在しており，これらはまだ，統合されるには至っていない。また，この時期のもうひとつの特徴は，孤独感についての個人差を測定するための測度を開発する必要性が強調された点である (Bradley, 1969 ; Eddy, 1961 ; Sisenwein, 1964)。

1970年代から1980年代にかけては，孤独に関する文献数が飛躍的に増加しており[1)]，このことは，以下の特徴と関連するものと思われる。まず第1に，これまで混沌としていた研究の成果を統合しようとする試みがなされたということである (Weiss, 1973 ; Peplau, & Perlman, 1982)。そして，さらに重要な点は，孤独感についての個人差を測定するための，信頼性，妥当性が充分に高い尺度が作成されたことである (Russell, Peplau, & Ferguson, 1978 ; Russell, Peplau, & Cutrona, 1980)。これ以後，この尺度を用いた実証的調査研究が数多くなされている。

孤独感の測定に関しては，Russell (1982) によると，次の2つの異なる概念的アプローチがとられてきた。ひとつは，一次元的アプローチであり，孤独感は本来，その経験された強度の中で変化する，単一の，あるいは一次元的な現象であるとみなすものである。Russell, Peplau, & Cutrona (1980) が開発した改訂版 UCLA 孤独感尺度はその代表的なものであり，工藤・西川 (1983) がその邦訳版を作成し，充分な信頼性と妥当性を報告している。もうひとつは，多次元的アプローチであり，孤独感は，一次元尺度によってとらえることのできない多次元的な現象であるとみなすものである。Schmidt, & Sermat (1983) が開発した Differential Loneliness Scale (DLS) はこのアプローチをとり，4×5の2つの直交する次元，すなわち，関係性の次元 ((1)家族関係，(2)友人関係，(3)恋愛関係，(4)より大きな集団，あるいはコミュニティでの関係) と相互作用性の次元 ((a)関係の存在と欠如，(b)特定の関係についての接近と回避，(c)協力，(d)評価，(e)特定の関係に含まれるコミュニケーション) から構成されている。広沢・田中 (1984) は，Schmidt, & Sermat (1983) に準拠して異なった関係における孤独感尺度を作成し，4つの関係性の次元が下位尺度を構成していることを報告している。また，尺度の信頼性は充分に認められており，さらに，改訂版 UCLA 孤独感尺度と自己報告による孤独感尺度を用いて，併存的妥当性を検討している。本研究は，広沢・田中 (1984) の項目水準での検討を通して不適切であると思われる項目を修正することによって，さらに高度に信頼できる尺度を作成することを第1の目的とするものである。

Peplau, & Perlman (1982) は，孤独感の研究において，孤独の先行条件，孤独の経験の諸特性，および孤独に対処する方法を区別する必要があると指摘している。

† 「本研究の一部は，日本教育心理学会第27回総会において発表された。なお，本論文の作成にあたり，田中國夫教授の御指導を賜わり，また，藤原香果（関西学院大学社会学部昭和59年度卒）の協力を得ました。ここに記して深く感謝いたします。

1) Peplau, & Perlman (1982) の「A Bibliography on Loneliness: 1932-1981」によると，1960年までの文献数が21，1960年代が53であるのに対し，1970年代は172に増加している。

そして，Rubenstein, & Shaver (1982) は，これらに対応させて，孤独の理由，孤独に対する感情反応，および孤独に対する対処行動について，因子分析的研究を行っている。さらに，広沢 (1985) は，Rubenstein, & Shaver (1982) に準拠して，孤独の原因，感情反応，および対処行動についての因子構造を明らかにすると共に，それらを説明するいくつかの次元を設定している。そこで，本研究は，孤独の原因，感情反応，および対処行動における性差，ならびに孤独感の強度による差を各因子ごとに明らかにすることを第2の目的とするものである。

方　法

(1) 予備調査

孤独の原因に関しては，「あなたは，どういうときに孤独を感じますか」，「あなたは，孤独に陥る原因として，どのようなものがあると思いますか」，感情反応に関しては，「あなたは，孤独に陥ったとき，どのような気持ちになりますか」，そして，対処行動に関しては，「あなたは，孤独に陥ったとき，ふつうどのような行動をとりますか」，「あなたは，孤独を解消しようとして，どのような行動をとりますか」という5つの質問を，関西学院大学の学生137名（男子95名，女子42名）を対象に，自由応答形式を用いて集団で実施した。そして，類似した反応をまとめたのちに，より網羅的に項目を抽出するため，Rubenstein, & Shaver (1982)，および，工藤・長田・下村 (1984) の質問項目を参考にし，最終的に，孤独の原因18項目，感情反応30項目，対処行動45項目から成る質問紙を作成した。

(2) 質問紙および尺度

1．孤独の原因に関する質問紙

孤独の原因に関する質問紙は，18項目から成っている。反応カテゴリーの形式は，「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全くそう思わない」の4件法で，孤独に陥る原因であると思うほど高得点になるように，1点から4点に得点化されている。

2．感情反応に関する質問紙

感情反応に関する質問紙は，30項目から成っている。反応カテゴリーの形式は，「非常にあてはまる」「あてはまる」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で，孤独に陥ったときの感情にあてはまるほど高得点になるように，1点から4点に得点化されている。

3．対処行動に関する質問紙

対処行動に関する質問紙は，45項目から成っている。反応カテゴリーの形式は，「しばしば行う」「時々行う」「どちらともいえない」「あまり行わない」「全く行わない」の5件法で，孤独に陥ったときにしばしば行う行動ほど高得点になるように，1点から5点に得点化されている。

4．改訂版 UCLA 孤独感尺度

Russell, Peplau, & Ferguson (1978) が既に標準化していた尺度を，Russell, Peplau, & Cutrona (1980) が再検討して構成し直したものである。この20項目から成る改訂版尺度は，原尺度でみられた反応バイアスを避けるために，表現内容がポジティブとネガティブの各10項目をこみにして無作為に配列されている。反応カテゴリーの形式は，「しばしば感じる」「時々感じる」「めったに感じない」「決して感じない」の4件法で，孤独感が高いほど高得点になるように1点から4点に得点化されており，各被験者の得点は，最高80点から最低20点の範囲内にある。なお，本研究では，信頼性，妥当性が充分に認められている，工藤・西川 (1983) による邦訳版を使用した。

5．異なった関係における孤独感尺度（修正版）

Schmidt, & Sermat (1983) が，多次元的アプローチにより開発した Differential Loneliness Scale (DLS) の概念モデルに基づき，広沢・田中 (1984) が，異なった関係における孤独感尺度を構成した。DLS の概念モデルは，4×5の2つの直交する次元，すなわち，関係性の次元（(1) 家族関係，② 友人関係，(3) 恋愛関係，(4) より大きな集団，あるいはコミュニティでの関係[2]）と相互作用性の次元（(a) 関係の存在と欠如，(b) 特定の関係についての接近と回避，(c) 協力，(d) 評価，(e) 特定の関係に含まれるコミュニケーション）から成る。この尺度は，各カテゴリーに2項目ずつ計40項目[3]から構成されており，反応バイアスを避けるために表現内容がポジティブとネガティブの各20項目をこみにして無

2）広沢・田中 (1984) は，関係性の次元における，より大きな集団，あるいはコミュニティでの関係を，クラブ内での関係に置換している。

3）広沢・田中 (1984) が項目分析を行った際に因子負荷量が.40未満であった4項目については，次のように修正した。「私には少なくともひとり，同性の親友がいる」→「私には気心の知れた友だちがいる」（友人関係—関係の存在と欠如），「私は友だちと親しくなれるように努力している」→「私は友だちとより親密になれるように努力している」（友人関係—特定の関係についての接近と回避），「好きな人に好かれようといつも努力している」→「私は恋人のことをもっと知りたいと思う」（恋愛関係—特定の関係についての接近と回避），「クラブの中には私の気持ちや考えを理解してくれる人がいない」→「クラブの中には私の気持ちや考えを理解してくれる人が少ない」（クラブ内での関係—特定の関係に含まれるコミュニケーション）。

Table 1　Item wording, item scoring key, factor loadings, and discrimination indexes for the Differential Loneliness Scale

Item and scoring key†		Factors				Discrimination	
		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	D††	γ†††
1 a	喜びや悲しみをわかち合える恋人がいない。(T)	**.93**	−.05	.04	.03	47.82	.83
2 a	私には現在，とても大切な恋人がいる。(F)	**.94**	−.02	.03	−.02	39.69	.85
3 b	私はできるだけ恋人といっしょにいられるように努力している。(F)	**.94**	−.03	.02	−.00	34.02	.85
4 b	私は恋人のことをもっと知りたいと思う。(F)	**.90**	−.02	.05	−.04	43.20	.75
5 c	どんな時でも恋人だけは私の味方である。(F)	**.94**	−.06	.02	.04	31.52	.84
6 c	恋人は私の心の支えである。(F)	**.96**	−.02	.02	−.03	58.23	.88
7 d	私は恋人の心の重要な部分を占めていると思う。(F)	**.95**	−.02	.08	−.00	51.97	.87
8 d	恋人とはお互いに人格を認めあっている。(F)	**.96**	−.04	.07	.04	55.95	.90
9 e	恋人は本当の私を理解してくれていると思う。(F)	**.94**	.00	.03	.05	40.41	.83
10 e	恋人には素直に自分の気持ちを表現できる。(F)	**.94**	.00	.08	.05	43.20	.86
11 a	クラブの中には友だちがあまりいない。(T)	−.05	**.92**	.14	.02	14.19	.60
12 a	私にはクラブの一員だという自覚がない。(T)	−.02	**.92**	.04	.02	14.24	.59
13 b	私はクラブにとけこめるように自分から努力している。(F)	−.07	**.90**	.06	.03	16.04	.55
14 b	クラブの中では自分をあまり出していない。(T)	−.02	**.90**	.11	.01	16.15	.58
15 c	困った時，クラブの人たちは私を支えてくれると思う。(F)	−.04	**.88**	.11	.07	13.13	.53
16 c	クラブではみんなと力を合わせて活動している。(F)	−.02	**.90**	−.00	.03	14.46	.52
17 d	クラブの人たちは私の考えや感じていることに関心がない。(T)	−.01	**.91**	.11	.05	12.91	.55
18 d	私は今のクラブに不満を感じている。(T)	.02	**.84**	.01	.01	8.75	.34
19 e	クラブの中には私の気持ちや考えを理解してくれる人が少ない。(T)	.02	**.90**	.15	.07	14.70	.57
20 e	クラブの人とは気楽に話せる。(F)	−.03	**.90**	.10	.03	15.25	.54
21 a	私のまわりにはあまり多くの友だちがいない。(T)	.05	.07	**.69**	.16	18.86	.63
22 a	私には気心の知れた友だちがいる。(F)	.03	.06	**.78**	.15	17.42	.72
23 b	自分から友だちを作ったり好かれようと努力しても思うようにはうまくいかない。(T)	.06	−.02	**.53**	.07	11.11	.43
24 b	私は友だちとより親密になれるように努力している。(F)	−.01	.05	**.52**	.15	9.95	.45
25 c	同じ目標に向かっていっしょに努力できる友だちがほとんどいない。(T)	.10	.11	**.61**	.14	16.02	.55
26 c	私には困った時に助け合える友だちがあまりいない。(T)	.02	.06	**.87**	.17	26.85	.83
27 d	友だちは私のしていることに興味や関心を示してくれる。(F)	.02	.15	**.62**	.14	13.28	.57
28 d	私の友情は結局はうわべだけのものにすぎない。(T)	.06	.08	**.69**	.15	18.21	.63
29 e	私には心を開いて話せる友だちがあまりいない。(T)	.01	.05	**.85**	.16	23.61	.80
30 e	私の考えや気持ちを理解してくれる友だちは，ほとんどいない。(T)	.02	.10	**.82**	.22	23.19	.79
31 a	私は家族の一員だと心から感じる。(F)	−.05	.10	.16	**.60**	14.14	.52
32 a	私の家族はお互いにうちとけて，うまくいっている。(F)	−.01	−.00	.15	**.77**	20.58	.69
33 b	家族は自分たちのことに忙しくて，私のことにはかまわない。(T)	−.06	−.04	.11	**.55**	13.74	.46
34 b	私は家族に対して自分をあまり出していない。(T)	.02	.02	.12	**.68**	18.72	.60
35 c	困った時でも家族は頼りにならない。(T)	.01	.02	.15	**.65**	15.85	.58
36 c	私の家族はいつもお互いに助け合っている。(F)	.03	−.03	.22	**.71**	17.37	.63
37 d	家族は私の能力や可能性を認めていないと思う。(T)	.10	.05	.10	**.65**	14.49	.55
38 d	家族は私の意見をあまり尊重してくれない。(T)	−.01	.07	.12	**.65**	13.30	.57
39 e	私は家族と話す時間を大切にしている。(F)	−.02	.09	.08	**.69**	18.16	.60
40 e	家族の誰も，本当に私を理解しているとは思わない。(T)	.09	.00	.21	**.72**	20.77	.65

Note. a : presence vs absence, b : approach vs avoidance, c : cooperation, d : evaluation, e : communication

† T＝true ; F＝fales, T denotes items coded in direction of high loneliness.

†† D＝Discrimination : Difference between mean scores in upper and lower thirds of total scores

††† Pearson's product moment correlation coefficient between individual items and total scores

作為に配列されている。反応カテゴリーの形式は，「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で，孤独感が高いほど高得点になるように1点から4点に得点化されており，各被験者の得点範囲は，各関係性の次元ごとに最高40点から最低10点の範囲内にある。

(3) 調査対象

対象者は，関西学院大学の学生，男子209，女子193の計402名で，学年別内訳は，1年から4年の順に，男子42，90，49，28，女子46，87，35，25で，平均年齢は，20.5歳であった。

(4) 調査の実施

調査は，1984年11月に質問紙によって集団で実施された。

結　　果

(1) 異なった関係における孤独感尺度（修正版）の主成分分析[4)]

孤独感尺度40項目の相関マトリックスからScreetestにより最終的に因子数を4と決定し，主成分分析を行いVarimax回転後の因子負荷量を示したのが，**Table 1**である。これらの累積分散寄与率は67.9％で，説明分散の大きい順にみていくと，第Ⅰ因子は恋愛関係における孤独感を示す10項目すべてが.90以上の因子負荷量，第Ⅱ因子は集団内での関係を示す10項目が.84以上の因子負荷量，第Ⅲ因子は友人関係を示す10項目が.52以上の因子負荷量，第Ⅳ因子は家族関係を示す10項目が.55以上の因子負荷量をそれぞれ示している。したがって，第Ⅰ因子は恋愛関係，第Ⅱ因子は集団内での関係，第Ⅲ因子は友人関係，第Ⅳ因子は家族関係における孤独感の因子と命名され，各因子は，概念モデルの関係性の次元と対応していることが示された。

次に4因子の相互相関[5)]を調べたところ，**Table 2**より，友人関係と集団内での関係は r ＝ .52，家族関係と友人関係は r ＝ .40 とやや低い相関があり，家族関係と集団内での関係は r ＝ .28，友人関係と恋愛関係は r ＝ .25，集団内での関係と恋愛関係は r ＝ .21 より低い相関がみられたが，家族関係と恋愛関係の間には有意な相関が認められなかった。したがって，下位尺度間の相互関係は高いとはいえず，よって，各下位尺度は独自性をもつと考えられる。

(2) 尺度の信頼性

1．項目水準での検討

大学生352名の40項目全体の得点分布から，上位33.3％を上位群，下位33.3％を下位群として抽出し，各項目についてt検定によるGP分析を行った結果，40項目すべてにおいて0.1％水準で有意差が検出された。したがって，本尺度40項目のいずれもが，孤独感を測定する上で高い弁別力をもつことが示された。同様にして，各下位尺度ごとの10項目についてt検定によるGP分析を行った結果が，Table 1に示されており，すべての項目において0.1％水準で有意差が検出された。以上より，さらに，各下位尺度10項目のいずれもが，それぞれの関係における孤独感を測定する上で高い弁別力をもつことが示された。

また，Table 1には，各下位尺度内の10項目におけるそれぞれの項目と残り9項目の尺度得点との間の項目—尺度間相関係数が示されているが，すべての項目は各下位尺度とかなり高い相関があることがわかる。

2．尺度水準での検討

次に，尺度の内的一貫性を尺度水準で検討するために，α係数が算出された。尺度全体では.92（N＝352），

Table 2　Internal consistency reliabilities, intercorrelations of subscales, and correlations of subscales with UCLA Loneliness Scale

Condition	Fam.	Fr.	R.S.	Gr.	α係数
1．Family	——	.40*	.09	.28*	.87
2．Friends		——	.25*	.52*	.89
3．Romantic-sexual			——	.21*	.97
4．Groups				——	.84
UCLA Loneliness Scale	.42*	.83*	.27*	.42*	

Note.　* P<.001

4）4つの関係性の次元（家族関係，友人関係，恋愛関係，集団内での関係）を満足する大学生352名（男子170，女子182）の分析結果である。

5）それぞれの因子に含まれる各項目の素点の総和を各被験者ごとに求め，その得点をもとに各因子間のピアソンの積率相関係数を算出した。なお，改訂版UCLA孤独感尺度との相関係数も同様にして算出した。

Table 3　Item wording and factor loadings for causes of being alone

第Ⅰ因子 「積極的な対人接触の欠如」	5	自分のことをまわりの人たちに知ってもらおうとしないから	.758
	11	自分が積極的に友達を作ろうとしないから	.735
	7	自分には友達ができないと思い込んでいるため	.639
	6	物事を悲観的に考えすぎているため	.561
第Ⅱ因子 「対人的疎外」	13	人からの愛情や信頼が信じられないため	.678
	14	自分に頼れる人がいないため	.644
	15	身近な人との別離があったから	.493
	17	自分を頼りにしてくれる人がいないため	.491
	3	家庭環境に問題があるため	.404
第Ⅲ因子 「機会の欠如・環境の変化」	4	たまたま自分のそばにいるのが知らない人ばかりだから	.781
	9	進学，就職，引越などで，環境が変化したから	.656
	10	自分のそばに誰もいないから	.555
	18	友達を作る機会に恵まれていないため	.459
第Ⅳ因子 「対人恐怖」	1	人から拒絶されるのではないかという恐れを抱いているため	.724
	2	まわりにいる人たちが自分を仲間に加えようとしてくれないため	.722
第Ⅴ因子 「考え方の相異・性格」	8	まわりの人たちの考え方と，自分の考えが異なっているため	.754
	12	自分自身の性格のため	.648

Table 4　Item wording and factor loadings for feelings when lonely

第Ⅰ因子 「抑 う つ」	9	ゆううつな	.598
	28	わびしい	.595
	15	むなしい	.584
	23	意気消沈した	.582
	21	不安な	.487
第Ⅱ因子 「絶　　望」	22	死にたい	.699
	14	何も信じられない	.651
	13	逃げてしまいたい	.526
	19	誰にも会いたくない	.494
	25	泣きたい	.487
	26	恐ろしい	.472
	7	絶望的な	.470
第Ⅲ因子 「人恋しさ」	10	誰かそばにいてほしい	.796
	1	誰かに会いたい	.771
	29	誰かに甘えたい	.710
	12	誰かにすがりたい	.710
	11	さびしい	.483
	19	誰にも会いたくない	−.406
第Ⅳ因子 「憐　　憫」	4	情けない	.658
	5	みじめな	.602
	6	腹立たしい	.487
第Ⅴ因子 「苛 立 ち」	20	イライラする	.644
	18	くやしい	.607
	6	腹立たしい	.589
第Ⅵ因子 「疎 外 感」	3	どこかへ行きたい	−.542
	16	取り残された	.528
	24	疎外された	.447
	17	他人がうらやましい	.443

下位尺度別にみると，家族関係で.87（N＝402），友人関係で.89（N＝402），恋愛関係で.97（N＝367），集団内での関係で.84（N＝368）より，尺度の等質性は充分保たれているということができる。

(3) 尺度の妥当性

尺度の併存的妥当性を検討するために，改訂版UCLA 孤独感尺度を取り上げ，各下位尺度との対応関係を示したのが，Table 2 である。友人関係とは r＝.83 の高い相関，家族関係，および集団内での関係とはともに r＝.42 とやや低い相関，恋愛関係とは r＝.27 と低い相関が認められた。すべての下位尺度が改訂版UCLA 孤独感尺度と有意な相関を示しているものの，

Table 5　Item wording and factor loadings for coping behaviors to loneliness

第Ⅰ因子「憂さ晴らし」	27	タバコを吸う	.695
	20	車やバイクで走りまわる	.690
	18	パチンコをする	.686
	31	マージャンをする	.611
	15	酒を飲む	.586
	21	ディスコに行く	.469
	7	ＴＶゲームをする	.444
	29	旅に出る	.441
第Ⅱ因子「趣味・仕事への没頭」	22	何か（趣味など）に熱中する	.686
	14	読書をする	.619
	43	楽しいことを考える	.541
	39	音楽を聴く	.468
	42	ラジオを聞く	.460
	9	仕事や勉学に打ち込む	.448
第Ⅲ因子「対人接触」	1	親しい人に会う	.692
	6	誰かに気持ちを打ち明ける	.672
	25	誰かに電話する	.650
	37	スポーツをする	.458
	32	バカ騒ぎをする	.421
第Ⅳ因子「忍耐・待機」	19	時がたつのをまつ	.625
	8	じっと耐える	.615
	17	ひとりになる	.614
	44	何もしないでいる	.571
	34	空想にふける	.485
	38	自分を見つめ直す	.443
	4	寝　る	.425
	24	開き直る	.404
第Ⅴ因子「身近な行動への逃避」	30	買物に行く	.594
	12	人の多くいる所に行く	.552
	2	自分の身のまわりを整理整頓する	.517
	11	映画や劇を見に行く	.503
	5	食べる	.450
	16	料理をする	.431
	33	歩きまわる	.430
第Ⅵ因子「情緒的逃避」	36	日記をつける	.696
	40	詩や歌を作る	.625
	13	手紙を書く	.500
	23	テレビを見る	−.489
	28	泣　く	.448
第Ⅶ因子「甘　え」	26	親に甘える	.563
	10	人にやつあたりをする	.538
	41	ペットと遊ぶ	.465

各関係性の次元によって差があり，友人関係における孤独感との関連性が最も強く，次いで，家族関係と集団内での関係であり，恋愛関係における孤独感とは関連性が弱いことから，少し性質を異にするものと思われる。

(4) 孤独の原因，感情反応，および対処行動の主成分分析

Table 3 は，孤独の原因18項目の相関マトリックスから Screetest により最終的に因子数を5と決定し，主成分分析を行い Promax 回転後の因子負荷量[6]の絶対値が.40以上のものを示したものである。これらの累積分散寄与率は55.7％で，説明分散の大きい順に，第Ⅰ因子は「積極的な対人接触の欠如」因子，第Ⅱ因子は「対人的疎外」因子，第Ⅲ因子は「機会の欠如・環境の変化」因子，第Ⅳ因子は「対人恐怖」因子，第Ⅴ因子は「考え方の相異・性格」因子と命名された。

Table 4 は，感情反応30項目の相関マトリックスから Screetest により最終的に因子数を6と決定し，主成分分析を行い Promax 回転後の因子負荷量[7]の絶対値が.40以上のものを示したものである。これらの累積分散寄与率は59.4％で，説明分散の大きい順に，第Ⅰ因子は「抑うつ」因子，第Ⅱ因子は「絶望」因子，第Ⅲ因子は「人恋しさ」因子，第Ⅳ因子は「憐憫」因子，第Ⅴ因子は「苛立ち」因子，第Ⅵ因子は「疎外感」因子と命名された。

Table 5 は，対処行動45項目の相関マトリックスから Screetest により最終的に因子数を7と決定し，主成分分析を行い Varimax 回転後の因子負荷量の絶対値が.40以上のものを示したものである。これらの累積分散寄与率は43.4％で，説明分散の大きい順に，第Ⅰ因子は「憂

Table 6　Differences in causes, feelings, and coping behaviors by sex and degree of loneliness

	Factors	Males	Females	Loneliness (Males)		Loneliness (Females)	
				Low	High	Low	High
原因	Ⅰ 積極的な対人接触の欠如	2.68	2.66	2.72	2.65	2.71	2.62
	Ⅱ 対人的疎外	2.22	2.28	2.22	2.23	2.28	2.29
	Ⅲ 機会の欠如・環境の変化	2.07	2.04	2.02	2.12	1.98	2.10
	Ⅳ 対人恐怖	2.59	2.65	2.66	2.51	2.57	2.72
	Ⅴ 考え方の相異・性格	2.60	2.59	2.48 **	2.72	2.46 **	2.71
感情反応	Ⅰ 抑うつ	2.71 ***	2.93	2.72	2.71	2.91	2.94
	Ⅱ 絶望	1.93 *	2.05	1.85 *	2.02	1.99	2.10
	Ⅲ 人恋しさ	2.90 ***	3.18	3.10 ***	2.70	3.28 *	3.08
	Ⅳ 憐憫	2.36	2.36	2.43	2.29	2.26 *	2.46
	Ⅴ 苛立ち	2.22 *	2.08	2.23	2.20	2.01	2.14
	Ⅵ 疎外感	2.45 (*)	2.55	2.49	2.41	2.50	2.60
対処行動	Ⅰ 憂さ晴らし	2.04 ***	1.39	2.14 *	1.93	1.44	1.35
	Ⅱ 趣味・仕事への没頭	3.27	3.31	3.31	3.24	3.30 ***	3.32
	Ⅲ 対人接触	3.01 (*)	3.16	3.35 ***	2.66	3.42	2.91
	Ⅳ 忍耐・待機	3.37 *	3.53	3.33	3.42	3.49	3.58
	Ⅴ 身近な行動への逃避	2.48 ***	2.77	2.55	2.42	2.81	2.74
	Ⅵ 情緒的逃避	1.95 ***	2.64	1.88	2.02	2.74	2.55
	Ⅶ 甘え	1.83 ***	2.32	1.89	1.77	2.30	2.34

Note. (*) P<.10, * P<.05, ** P<.01, *** P<.001

6）準拠構造行列（reference structure matrix）の因子負荷量を採用した。
7）準拠構造行列（reference structure matrix）の因子負荷量を採用した。

さ晴らし」因子，第Ⅱ因子は「趣味・仕事への没頭」因子，第Ⅲ因子は「対人接触」因子，第Ⅳ因子は「忍耐・待機」因子，第Ⅴ因子は「身近な行動への逃避」因子，第Ⅵ因子は「情緒的逃避」因子，第Ⅶ因子は「甘え」因子と命名された。

(5) 孤独の原因，感情反応，および対処行動の性差

Table 6 は，因子別に，孤独の原因，感情反応，および対処行動の性差を示したものである。孤独の原因に関しては，5因子いずれにも性差はみられず，男女とも「対人的疎外」，「機会の欠如・環境の変化」といった外的要因よりは，「積極的な対人接触の欠如」，「対人恐怖」，「考え方の相異・性格」といった内的要因に帰属する傾向がある。感情反応に関しては，男子の方が「苛立ち」を覚えるのに対し，女子は「抑うつ」，「人恋しさ」，および「絶望」の感情を抱き，「疎外感」も高い傾向にある。また，全体的には「人恋しさ」や「抑うつ」の感情がよく抱かれているといえる。対処行動に関しては，男子の方がより「憂さ晴らし」の行動をとるのに対し，女子は「身近な行動への逃避」，「情緒的逃避」，「甘え」といった行動をとり，さらに「忍耐・待機」もよくみられ，「対人接触」も高い傾向にある。また，全体的には「忍耐・待機」，「趣味・仕事への没頭」，「対人接触」といった行動がよくとられているようである。

(6) 孤独の原因，感情反応，および対処行動の孤独感強度による差

改訂版 UCLA 孤独感尺度を用いて孤独感を測定した結果，男子で40.45点，女子で36.88点となり，男子の方が有意に孤独感が高かった（$P<.01$）。そこで，男女別に，孤独感得点の中央値によって High 群と Low 群の2群に分け，因子別に孤独の原因，感情反応，および対処行動の孤独感強度による差を示したのが，Table 6 である。孤独の原因に関しては，男女とも孤独感の高い人が低い人よりも「考え方の相異・性格」（内的—安定要因）に帰属させていることがわかる。感情反応に関しては，男女とも孤独感の低い人が高い人よりも「人恋しさ」の感情を抱き，さらに，男子では孤独感の高い人ほどより「絶望」感を抱くのに対し，女子では「憐憫」の感情をもつことが見出された。対処行動に関しては，男女とも孤独感の低い人が高い人よりも「対人接触」を行い，さらに，男子では孤独感の低い人ほどより「憂さ晴らし」の行動をとることが示されている。以上より，孤独の原因，感情反応，および対処行動の孤独感強度による差は，男女間でほぼ類似した傾向が示されていることがわかる。

考　　察

本研究では，広沢・田中（1984）が作成した異なった関係における孤独感尺度において不適切であると思われる項目を修正し，その修正版の主成分分析を行い Varimax 回転を施した結果，恋愛関係，集団内での関係，友人関係，家族関係における孤独感の4因子が抽出された。各因子が抽出された順位は，広沢・田中（1984）と異なるものの，各関係性の次元に対応した因子が見出され，各次元の独自性が再確認された。さらに，4因子の累積分散寄与率が45.9％から67.9％へ大幅に増加していることから，より明確な4因子構造を成していると考えられる。このことは，修正された4項目が適切であったことを一部裏付けるものである。また，調査対象者を大学生に限定したことも，明確な因子構造を生み出す一因になったと推測される。次に，4因子間の相互相関を比較すると，原尺度（$\bar{r}=.23$）に比べ修正版は $\bar{r}=.29$ とわずかに高いが，ほとんど差がないことから，原尺度と同様に各因子が下位尺度を構成しているといえよう。

尺度の内的一貫性による信頼性係数を比較すると，原尺度の α 係数が.88であるのに対し，修正版は.92とわずかに上回っている。また，下位尺度の α 係数を比較すると，原尺度と修正版では，家族関係が.85と.87，友人関係が.81と.89，恋愛関係が.91と.97，集団内での関係はともに.84より，下位尺度も同様に本尺度の方がわずかに高い値を示す傾向にあり，各下位尺度の等質性もさらに充分認められたといえる。

改訂版 UCLA 孤独感尺度と各下位尺度との関連性を，原尺度と修正版で比較してみると，友人関係（$r=.73$, .83），集団内での関係（$r=.41$, .42），家族関係（$r=.37$, .42），恋愛関係（$r=.26$, .27）となり，すべての下位尺度でほぼ等しいことから，「青年期における孤独感は，友人関係と密接に関連しており，さらに，集団との関係や家族関係も重要であると思われるが，恋愛関係との関連性は弱く，このことから，恋愛関係における孤独感はやや異質なもののように思われる」（広沢・田中，1984，p. 187）を追証するものであると考えられる。

以上より，修正版は，原尺度よりも明確な4因子構造を成し，また，各因子は独自性をもつと同時に下位尺度を構成しており，内的一貫性も高いことから，さらに高度に信頼できる尺度であるといえる。

次に，孤独の原因，感情反応，および対処行動に関する性差について検討していく。孤独の原因に関しては，5因子のいずれにも性差がみられず，男女ともに外

的要因よりは内的要因に帰属する傾向が高かった。しかしながら，感情反応と対処行動に関して男女を比較すると，男子は孤独に陥ると「苛立ち」を覚え，「憂さ晴らし」といった行動をよくとるのに対し，女子は「抑うつ」，「人恋しさ」，「絶望」感を抱き，「疎外感」も高くなって，「身近な行動への逃避」，「情緒的逃避」，「甘え」といった行動をとったり，「忍耐・待機」もみられるが，「対人接触」行動も男子より高い傾向にあった。

以上より，感情反応と対処行動に関しては，かなり性差が見出され，さらに，両者の間には一貫した傾向が見受けられる。工藤・長田・下村（1984）は，高齢者（平均年齢：男性69.6歳，女性65.5歳）を対象に，孤独感の強度，孤独に対する対処行動，ならびに感情反応について調査し，男女別に因子分析した結果，男女間の因子の重要性の順位，ならびにその内容に差異のあることを示し，対処行動と感情反応との間に一貫性が見受けられるとしているが，本結果より，大学生においてもこのことが一部検証されたといえる。

さらに，孤独の原因，感情反応，および対処行動に関する孤独感の強度による差を検討していくことにする。まず，孤独感の性差についてみてみると，改訂版UCLA孤独感尺度を用いたRussell, Peplau, & Cutrona（1980）の第1研究では，大学新入生において，男子は女子に比べより強い孤独感を報告していたが，第2研究では有意な差が検出されなかった。このような矛盾した結果について，Russell, Peplau, & Cutrona（1980）は，男子学生に関して測定前の帰省経験の有無というサンプル・バイアスが働いたためであると結論づけている。工藤・西川（1983）は，大学新入生の間で男子は女子に比べて孤独感が強いことを見出しているものの，他のいずれの群においても性差はみられなかったと報告している。一般的に，性差に関しては，女性は男性より孤独感が強い（Donson, & Georgés, 1967；Weiss, 1973）という知見と，やもめ暮しの男性では同じような状態の女性に比べて孤独感が強い（Shaver, & Rubenstein, 1979）という相反する結果が報告されている。孤独感は，人々のおかれている物理的環境条件や社会経済的地位などとともに，家族関係，友人関係，および地域活動への参加度などに反映される個人の心理的要因と深く関連しているため，性差に関する一般的結論を導き出すことは，困難であると思われる。本結果では，男子大学生が女子大学生に比べてより強い孤独感を報告していたので，孤独の原因，感情反応，および対処行動に関する孤独感の強度による差を，男女別に検討したわけである。

ところで，落合（1982）は，青年期から成人前期までの孤独感の構造は，対自的次元と対他的次元から成る2次元構造であるとしており，また，広沢（1985）も，孤独の原因，感情反応，および対処行動の各因子構造を説明するいくつかの次元を設定している。そこで，広沢（1985）の設定した次元の中から対自的次元と対他的次元にのみ注目して見ていくものとする。

はじめに，男女に共通していえることは，孤独感の高い人は，孤独の原因を「考え方の相異・性格」（内的—安定要因）に帰属させるのに対し，孤独感の低い人は，「人恋しさ」（対他的）の感情を抱きやすく，「対人接触」（対他的）といった行動を多くとることが明らかになった。また，男子では，孤独感の高い人がより「絶望」（対自的）感を抱くのに対し，女子では，孤独感の高い人がより「憐憫」（対自的）の感情をもつことが見出され，さらに，男子では，孤独感の低い人がより「憂さ晴らし」（対自的）の行動をとることが示されている。したがって，一般に孤独感の高い人は，孤独の原因を内的—安定要因に帰属させることによって対自的な感情を抱きやすくなり，対他的な行動を起こすことが減少するのに対し，孤独感の低い人は，対他的な感情をもち，対他的な行動をとることによって孤独を解消していくように思われる。ただし，「憂さ晴らし」（対自的）だけは例外で，孤独感の低い男子特有の対処行動であるといえよう。

以上より，孤独感の高い人は，孤独の原因を内的—安定要因に帰属させることによって対自的な感情反応を引き起こし，その結果，対他的な行動が減少し，さらに，孤独に陥るという機制が働いていると推測される。そこで，孤独感の高い人が孤独を解消するためには，何よりもまず，孤独の原因帰属を変化させる，すなわち孤独の原因を外的要因に帰属させることが第一であると思われる。

今後は，異なった関係における孤独感尺度（修正版）を幅広い調査対象に実施することによって，孤独感を規定する社会的関係と準拠集団との関係を明らかにすると共に，孤独の原因，感情反応，および対処行動の相互関係を，性差や孤独感の強度も考慮して，詳細に検討していくつもりである。

引用文献

Bradley, R. 1969 *Measuring loneliness*. Unpublished doctoral dissertation, Washington State University.

Donson, C., & Georgés, A. 1967 *Lonely-land and bed-sitter-land*. Bala, North Wales : Chapples.

Eddy, P. D. 1961 *Loneliness : A discrepancy with the phenomenological self*. Unpublished doctoral dissertation, Adelphi College.

Fromm-Reichmann, F. 1959 Loneliness : *Psychiatry*, 22, 1—15.

広沢俊宗・田中國夫　1984　異なった関係における孤独感尺度の構成　関西学院大学社会学部紀要, 49, 179—188.

広沢俊宗　1985　孤独感の原因, 感情反応, および対処行動に関する研究(I)　関西学院大学社会学部紀要, 51, 157—168.

工藤　力・長田久雄・下村陽一　1984　高齢者の孤独に関する因子分析的研究　老年社会科学, 6(2), 167—185.

工藤　力・西川正之　1983　孤独感に関する研究(I)—孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討—　実験社会心理学研究, 22, 99—108.

Lopata, H. Z. 1969 Loneliness : Forms and components. *Social Problems*, 17, 248—261.

Lowenthal, M. F. 1964 Social isolation and mental illness in old age. *American Sociological Review*, 29, 54—70.

Moustakas, C. E. 1961 *Loneliness*. New York : Prentice-Hall.

落合良行　1982　孤独感の内包的構造に関する仮説　教育心理学研究, 30, 233—238.

Peplau, L. A., & Perlman, D. 1982 Perspectives on loneliness. In Peplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness : A sourcebook of current theory, research, and therapy*. John Wiley & Sons, Inc.

Rubenstein, C. M., & Shaver, P. 1982 The experience of loneliness. In Peplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness : A sourcebook of current theory, research, and therapy*. John Wiley & Sons, Inc.

Russell, D. 1982 The measurement of loneliness. In Peplau, L. A., & Perlman, D. (Eds.), *Loneliness : A sourcebook of current theory, research, and therapy*. John Wiley & Sons, Inc.

Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. 1980 The revised UCLA loneliness scale : Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472—480.

Russell, D., Peplau, L. A., & Ferguson, M. 1978 Developing a measure of loneliness. *Journal of Personality Assesment*, 42, 290—293.

Schmidt, N., & Sermat, V. 1983 Measuring loneliness in different Relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 1038—1047.

Shaver, P., & Rubenstein, C. 1979 Living alone, loneliness, and health. Paper presented at the 87th Annual Convention of the American Psychological Association, New York City.

Sisenwein, R. J. 1964 *Loneliness and the individual as viewed by himself and others*. Unpublished doctoral dissertation, Columbia University.

Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York : Norton.

Tunstall, J. 1967 *Old and alone*. New York : Humanities Press, Inc.

Von Witzleben, H. D. 1958 On loneliness. *Psychiatry*, 21, 37—43.

Weiss, R. S. 1973 *Loneliness : The experience of emotional and social isolation*. Cambridge, Mass. : MIT Press.

Zilboorg, G. 1938 Loneliness. Atlantic Monthly, January, 45—54.